

地球人になるには--私の体験的国際化論

はじめに

ご懇切な紹介を頂きありがとうございます。この香川県大川郡ライオンズ・クラブの「世界を知ろう会」は五年前に発足したと聞いておりますが、以来、田中会長、橋本・長町両副会長をはじめ役員の皆様方のご尽力によって、講演会の開催をはじめ、若い世代の国際交流の事業など活発な活動をしてこられ、この地域の国際化を進めていくうえで大変注目すべき実績を挙げておられると承っております。

このことは地元の新聞などにも何度か取り上げられているとのことであり、ご関係の方々のご努力に対して深く敬意を表する次第でございます。そして本日は、こうした会の会員総会でお話しをする機会をあたえられ、誠に光栄に存じます。

本日、私にあたえられたテーマとしては、「地球人になるには」という大へん雄大な、しかしとても難しい演題が掲げられております。もともと「世界を知ろう会」の狙いは、「二十一世紀を担う若者たちにグローバルな(地球的な)視野と地球人としてのセンスを磨いてもらうこと」(会則)であることから考えると、このテーマは大変ふさわしいものであると思います。しかし、この問題に対して、学問的な解釈や網羅的な解答を提示する能力は、残念ながら私にはありません。

ただ、幸いなことには、副題として「私の体験的国際化論」と入れてくださっておりますので、本日は、私がこれまでに外国と関わってきた経験をまずいくつかお話ししてみたいと思います。そして次に、外国人と気持ち良く付き合い、その関係を実り多いものにするには、どういうことが大切か、といった課題を個人的な体験に基づいてお話してみることにはしたい。

国際化とは、その背景

「国際化」という言葉を聞いた場合、皆様は何を想起されるでしょうか。ある人は、夏休みの旅行や新婚旅行の目的地が外国である場合のような、海外への旅行がまず頭に浮かぶことでしょう。円相場が上昇したお陰で、今や国内の温泉・名所旧跡巡りよりも、夏休みの旅行先としてはハワイ、グアムや、涼しいカナダなどが安くつく状況ですし、また新婚旅行先もオーストラリアやニュージーランドなどが一般的になっています。

また別な人にとっては、仕事の上で外国との関わりあいが多くなることが国際化のイメージとして捉えられているかも知れません。ことに、香川県東讃の当地は、全国に知られた手袋の産地であることから、そのデザインや販売の関係でアメリカやヨーロッパとの関係が一層深まっており、また近年は、原料の調達、生産などの関係で韓国、中国、インドネシア等へのご出張が増えている方も少なくないことでしょう。

あるいは、われわれの周囲に外国人を日常よく見かけるようになることが国際化だとみる観点も十分ありえましょう。近年では、地元の中学校でも、英語を教えてもらうために外国人を招聘しているとのことであり、当地でも外国人を見かけるとのことが珍しくなくなっているようです。私の学生時代には、授業でも外国人から英語を学ぶことはなかったので、それからみると隔世の感があり、また今の学生がうらやましいと思います。

このように仕事や休暇で外国人、外国の風土・文化に直接接触する機会が増え、また我々の周りにも外国人をよく目の辺りにする形で外国との触れ合いが増加しているのは、第一には、日本の経済の国際化が進んできたからです。わが国は、天然資源が乏しいので、それ

を克服して生活水準の向上を図っていくには、資源を海外から入手し、製品やサービスを外国に販売していく以外に有効な方法はありません。つまり、われわれ日本人にとっては、生活水準を向上させる上では、外国との付き合い増大がいわば宿命であるわけです。

第二には、近年の円高化が、国際化にとって大きな要因となっています。つい十年前までは一ドル＝二五 円でしたが、今や一ドル＝一 円の時代になっています。このため、かつては、輸入ウイスキー（ジョニ黒）は一万円もしましたが、いまではそれがわずか三千円で手に入ります。また、旅行をするにしても、北海道や沖縄へのパック旅行は十万円かかるのに対し、グアム島へのパック旅行はわずか五万円で済むといったように、海外旅行のほうがかつて安くなっている。そして企業にとっても、円高の下では、国内で設備を拡張するよりも海外（ことに東アジア諸国）で工場を建設したり、あるいは現地企業を買収して生産体制の一環として組み込んだ方が、格段に有利な状況になっています。このように、円高が国際化に大きく拍車をかけています。

国際化の第三の要因は、外国への「憧れ」といったものがわれわれの意識の底流にあると考えられることです。「外国」というと、「未知の国」ないし何か「楽しい、素晴らしい所」という漠然としたイメージがあり、また「行ってみたい」という気分にならないでしょうか。結局は「隣の芝生は緑が濃く見える」のかも知れませんが、こうした認識パターンは、欧米では必ずしも一般的なものではなく、私も含めてむしろ日本人の深層心理にかなり特徴的なものであって、それが国際化を後押しする一つの要因になっているように思います。

以上のように、外国が近年ますます確実に身近なものになっていますが、他方では、外国とは、なかなか分からない国が多く、また色々不安が多いところである、という感想が聞かれます。そして、どのように外国人と接していくべきか、といったことも改めて話題になることも少なくありません。つまり、外国をもっと知る必要性が大きくなっており、また外国人との付き合い方を知る必要性高まっています。まさに、それが現代という時代に他なりません。

私の海外歴

こうした国際化現象は、実は、私自身のこれまでの経験についても妥当することです。小学生の頃には、豊かな米国に対する「憧れ」の気持ちを強く持っていたのは事実ですし、また、大学卒業後の仕事の面でも、日本経済が国際化するにつれて、海外出張や海外駐在、あるいは外国人を相手とする場面も増加してきました。本日のこのような場で、個人の履歴を語るのは気が引けますが、ひとつの具体的な例という意味で、私の海外歴をご紹介します。

省みると、今までの五十年余りの人生のうち、外国で生活した期間は合計約十年になります。高校時代と大学時代に各一年間、アメリカに留学する機会がありました。また就職後には、米国の大学院に二年間留学したほか、ロンドンでの勤務も二年間経験しました。そして、この三月までの最近四年間は、勤務先からの派遣によりアメリカの二つの大学とオーストラリアの大学で教壇に立つ機会が与えられました。

留学や仕事の機会を得て、米国、ヨーロッパ、そして南半球でこのような貴重な経験をすることができ、お陰でそれぞれの国に思い出がつきません。アメリカやヨーロッパについては、今や情報があふれており、また皆様もそれらの国についてはよくご存じだと思いますので、ここでは、オーストラリアのことを二つ、三つ述べてみたい。

オーストラリア、シドニーについて

オーストラリアといえば、カンガルー、コアラ、そして南十字星が連想されるイメージでしょう。同国を地図でみると、ちょうど日本の四国の形と酷似していますが、面積はなんと四国の四百二十倍、日本全体と比べてもその二十倍もある大きな国です(しかし、人口は日本の七分の一に過ぎない)。

この国の最大の都市シドニーは、海外の都市のうち住むのに理想的な三つの都市である「三つのS」の一つとされています。その三つとは、サンフランシスコ、シドニー、そしてシンガポール(あるいはシアトルないしサンパウロ)だそうです。これらの都市に共通しているのは、(一)美しい港湾都市であること、(二)温和な気候の地であること、(三)多様な文化が平和的に共生する町であること、などであり、いずれも魅力ある都市にとっての条件といえるでしょう。

シドニーでは、気候は温和ですが、春夏秋冬の四季はなく、むしろ夏とそうでない季節の二季しかない。夏でない季節というのは、春と秋を同時に取り合わせたような季節であり、日本の季節でいえば四、五月または十月という好季節に相当します。花が常に咲き乱れる美しい時期であり、これが一年の四分の三の期間も続くわけです。少ない人口がこうした自然環境の恩恵の下で生活していることもあってか、シドニーの人々の生活のリズムは、せかせかしたところがなくゆったりとしています。例えば、ゴルフにしても、土曜、日曜の午後にぶらりと出かけても、ほとんど待たずにプレーでき、しかもラウンドわずか千円あまりといった調子です。また、この人口三百万人の大都会シドニーですら、朝夕の通勤時でも車の渋滞はないといってよい状況です。

シドニーといえば、貝殻を重ねたような形の外観の白いオペラハウス、それに対岸を結ぶハーバーブリッジがこの都市のシンボルとなっています。このような文物が示すように、自然の恵みだけではなく、文化的にも欧米の主要都市に遜色のないユニークなイメージをもつ都市といえます。

オーストラリアは、現在も英連邦に属する国家です。かつて(一九六〇年代後半まで)は、いわゆる白豪主義を標榜していましたが、それは昔の話となり、いまではヨーロッパからだけではなく、中近東やアジア各国からの移民(とりわけ中国系の人々)の流入が増えています。このため、例えば私が担当していたクラスの学生の顔立ちをみても、およそ三分の一がアジア各国からの出身者(留学生、オーストラリア居住者、オーストラリア国籍の者)であり、また大学での同僚スタッフも外国生まれが過半を占める状況でした。このようにオーストラリアの社会は、急速に多民族化が進行し、多文化社会へ変化しつつあります。だから、ことにコスモポリタンなシドニーでは、世界各国の料理を提供するレストランが揃っており、食文化の面でも大変面白いところとなっています。

さらに、オーストラリアは、アメリカ(例えばニューヨーク)のように身の危険が心配となるような国ではない。生活水準が高くホテル等の設備も完備しているので、快適な旅行ができることです。また、海外旅行につきものである時差に苦しめられることもありません。旅行するにせよ、住むにせよ、とてもすばらしい国だと私は思っています。それは、何も私だけの感想ではなく、最近の調査によれば、日本人の新婚旅行先として同国は最も人気高い国となっていることにも現れています。海外旅行のお考えがある場合、そして同国をまだ訪問されていない方の場合には、是非オーストラリアをお薦めします(オーストラリアから宣伝料をもらっているわけではありません)。

話が相当横道に逸れましたが、現代は国境という概念が次第に薄れる(ボーダーレス化し

つつある)時代にあり、それは私自身の経験にもそれが反映しています。その例の一つは、今秋出版が予定されている日本経済についての本です。これは、日本人である私が、アメリカの大学における講義や、オーストラリアにいた時に多くの国の学者の論文を編集したものであり、イギリスの出版社から刊行されることになっています。つまり、この書物は、直接関係する国だけでも、四つの国にまたがった一つの産物となっています。

慶応義塾大学の湘南藤沢キャンパス

今一つの例は、私の現在の勤務先である慶応義塾大学の湘南藤沢キャンパス(SFC)です。慶応義塾大学は、皆様ご存じのように、今から百三十六年前に福沢諭吉によって創立された日本最古の大学です。SFCには、二つの学部(私の所属する総合政策学部ならびに環境情報学部)があり、慶應のなかで最も新しい学部を擁するだけでなく、大学のあり方に革新的な要素をもたらした例として日本の全大学のなかでも注目を集めております。

このキャンパスは、二十一世紀の大学における教育・研究のあり方の理念に基づき、湘南の丘陵地を切り開いて四年前に開設されたものです。そこでは、当然、国際化という時代が強く意識されています。例えば、外国語の教育にしても、従来の大学で伝統的だった英語、ドイツ語、フランス語、といった発想に縛られず、中国語、朝鮮語、インドネシア語などアジア諸国の言語も同様に重視した履修課程が設けられています(スペイン語も近い将来に加えられる予定です)。ことに、中国語の履修希望者は定員の二倍にも達する状況であり、今後の日本の国際化にとって一つの方向を示唆しているように思います。

外国人の教員も、全教員百二十人のうち十七、八人おり、また日本人の教員も、海外で研究、教職の経験をもつ者が大半です。そして学生の中には、入学前に海外での在学経験をもつ学生(帰国子女)も比較的多いといえます。さらに、このキャンパスはコンピューターのネットワークが完備しており、全世界を覆うインターネットを介して海外との交信、情報検索などが自由自在に行なえるので、情報と生活意識のうえでは国境の意識のない環境をすでに実現しています。

大学としてのこうした新しい方向に対する世間の関心から、ここへの訪問者は国内、海外からともに多く、私自身も、外国からの訪問者の案内役をしたり、また外国人も加わった討論会に出るといったことがあります。

「地球人」になるための三条件

さて、以上のような私の海外での経験、および現在の日本での仕事における国際化ということ踏まえて、何か参考になるようなことを次に申し上げなければなりません。もちろん、私の体験は相当に特殊な立場からの経験であり、また外国といっても英語圏だけの限られた経験でしかありませんが、本日の「地球人になるには」という問題への解答をあえて私なりに考え、それを三点あるいは三条件としてまとめてみたい。

またまた、ちょっと脱線しますが、三条件という形で三つにまとめることは、ものごとを捉える場合に私がよく利用する方法であり、長年、日本銀行で働いてきたことから身に付けた一つの整理方法です。例えば、「今月の景気動向の特徴は大きく三つにまとめられる」とか、「この銀行の経営戦略が成功している要因は大きくいって三点を指摘できる」とか、「この問題はとくに三つの側面から深く検討する必要がある」とかというかたちでの整理やプレゼンテーションをよく行ったものでした。

二つしか挙げないならば、少なすぎてまだ他にも見逃したことがあるのではないかという手抜きを感じ、あるいは不安がつきまといりますが、かといって、四つも列挙すると、大抵の場合が多すぎてずっと頭に入らないし、記憶にも残りにくい。その点、三つという数字は、整理するうえでとても利用しやすい数です。たとえ四つ以上を述べる必要があったとしても、三つを主題として扱い、その他は付随的に述べるという扱い方をするほうが、理解しやすい場合が多いというのがこれまでの経験です。

事実、三という数字は、極めて一般性の高い概念といえると思います。例えば、先ほど言及した海外の都市に関する「三つのS」、あらゆる色のもととなる「三原色」、国家の統治権における「三権」(分立の原則)、三つのものが本質において一つのものであることを意味する「三位一体」、皇位継承のしるしとされる「三種の神器」、仏教で最も尊敬すべき三つのものである「三宝」、落語の一種である「三題噺」、重要な条件を満たしているという意味でも使われる「三拍子」(そろった人)、相撲あるいは組織や団体に重要な地位を占める幹部を指す「三役」、ある方面ですぐれた三人という意味での「三羽烏」、などの表現があります。つまり、最も基本的な要素を三つで表わすことは、従来から行われてきたことです。なお、私自身、日銀在職時代に「日銀マンの三条件」というエッセーを書いたことがあります(拙著『金融政策を考える』に収録)。

論理の尊重

さて、「地球人になる」ための条件に話を戻すと、それは第一に、論理の尊重、つまり物事は何につけ筋道をはっきりさせて述べることだと思います。外国人を相手にする場合には、日常的な場面において物事を伝える場合、あるいは物事を頼む場合にはじまり、ビジネスの場面、さらには学問上の込み入ったやりとりをする場合なども含め、すべてのコミュニケーションにおいてこのことが基本的な重要性をもつと思います。

「そこを何とかしてほしい」といった情緒に頼るもって行き方を中心とするのではなく、対象となっている物事についての原則、あるいは理屈をはっきりさせて、筋を通してものごとを述べることは、結局は当方および相手方の双方にとってコミュニケーションの効率を高め、お互いにより納得のいく結果をもたらすので大切になるわけです。つまり、主張すべきことはちきんと主張することが大切です。「いうべき事は言うこと、いうべき時に言うこと、そしてはっきり言うこと」が必要だと思います。

そのためには、まず自分の意見を先ずはっきりさせる、そして相手に対してそれをはっきりと述べることを意味します。日本人同士にあっては、「ツーカー」、「以心伝心」というスタイルでコミュニケーションができる場合が少なくなく、またそれはある意味では効率的ともいえますが、外国人に接する場合には、万事はっきりした言い方をすることが極めて重要になります。

この点、日本の教育のあり方も、国際化時代に相応しく今一つ工夫を加えていく必要があるのではないのでしょうか。米国の教育は、もっとも極端な行き方かもしれませんが、ものごとはまず自分から言いだす、そして自分の立場を主張する、そのうえで交渉を開始する、その過程を通してお互いに議論を深めることができる、といった考え方が基礎になっているように思います。例えば、私が米国の大学で教壇に立っていた時、中間試験の採点を不服としてクレームをつけて来る学生も珍しくありませんでした。そうした場合には、当方がよく説明し、納得してもらおうことになるわけですが、そうした緊張関係が存在し、またそれを通して相互により納得が得られるようになります。

いま一つ具体的な例をあげると、外国旅行でホテルの部屋が予約した条件と違うといったような時には、予約書を見せてははっきりと善処方を要望すべきあり、筋が通ればホテル側もこちらにとって満足のいく対応をしてくれる可能性が大きいといえるでしょう。また、私のシドニーにおける経験ですが、自動車の新車購入の契約をした時、納入予定日になっても車が準備できておらず、特段の事情がないにもかかわらずあと十日間も待つてほしいというのがディーラーの対応でした。黙って引き下がっておれば、それまででしたが、私は筋論を通したことから予備の車を十日間貸与してくれ、結局、予定していた生活のスケジュールを乱さずに済みました。

さらに、シドニーにおいては、私はある大学(マックオーリー大学)内のひとつの研究所の運営を預かっていましたが、ある時、この研究所は他の研究所と比べて予算上特別の理由もなく不平等な扱いを受けていることに気づき、対等化する理由があることを主張しました。その結果、私の主張はもっともだとして受け入れられ、不平等は解消されました。

この大学は、オーストラリアの社会の宿因という面をもっており、組織上いわば「外国人の寄り合い世帯」といった性格をもつので、そこでは、筋を通すことつまり理由を明確にしつつ主張すべきことはきちんと主張することが大切であり、そして有効であったわけです。日本人の感覚からいうと、「角が立つのでそこまで言わなくともよいのではないか」とか、「そんなことは言わなくとも押し量ってくれるだろう」と勝手に思い込み勝ちですが、それは良い対応とはいえない場合が多い。

黙っているよりも、はっきり言うことが大切であり、また相手もそれを期待している場合が多いといってもよい。また、そうした方が、大抵の場合、よい結果をもたらすだけでなく、そうした主張をしても、それが筋道の通ったものであれば、後々まで感情的に尾を引くといったことは、我々日本人が考えるよりも少ない(ドライである)と私は感じています。

このように、ものごとは筋を通して処理していくという風習が基本となっているのは、やはり、社会の構成が一般に日本とは相当に違うことにあるからでしょう。日本は、単一人種、単一文化の国であり、これに比べると、海外諸国は、ことに米国やオーストラリアに典型的にみられるように、多様な民族、文化の混合である場合が多く、また対外的にもより開かれた社会であるので、新規参加者が継続的に流入する社会です。このため、社会構成員の間のコミュニケーションとものごとの取り運びにおいては、誰にも納得いく共通の尺度、すなわち論理性(筋が通っていること)がとりわけ重要になるわけであります。

思いやり

「地球人になる」ための第二の条件としては、思いやり、すなわち寛大な気持をもって臨み、相手の気持を察し、その立場を考えたいうえで行動をすることを挙げたい。これは、一見、第一に挙げた条件と矛盾するように感じるかもしれませんが、そうではありません。なぜなら、第一の条件は、当方が相手に十分「理解される」うえでの条件を述べたものであり、また当方の実際の言動に関する指摘でありました。これに対し、第二の条件は、当方が相手をよく「理解する」うえでの条件であり、また当方にとっては実際の言動というよりもむしろ心構え、気持の持ち方を中心と考えたものであるからです。

卑近な例をいくつかあげると、まず買い物をするような場合、レジの前にできた行列には途中から割り込むのではなく、きちんと行列に入って並んで待つ必要があります。これは、むしろルールないしマナーと言ってもよいようなことに属しますが、その基本には思いやりがあると

いえましょう。また、建物に出入りする場合のドアの開け閉めに際しては、自分が通った後に続いて来る人がいるかどうかに関心ではなく、後に来る人がいるかどうかを確認し、いる場合にはドアを押さえてやるのが思いやりでしょう。さらに、レストランあるいはホテルのロビーなどで傍若無人といった様子で大声を出している場合(とくに日本人の団体の場合)を見かけますが、これなども、その施設を利用しているその他の人のことを考えると、静粛にすることが思いやりといえましょう。

さらに例示を続けるならば、何かをもらったときには、すぐ「ありがとう」といえること、あるいは、相手が時間や労力を割いて当方のために何かをしてくれたような場合(例えば夕食へ招待を受けた場合)には、簡単にでも速やかにお礼状が書けること、などもこの精神に合致することといえましょう。さらにいうと、然るべき場面においては笑顔であいさつができることとか、約束の時間を守るといったことも、同様に思いやりといえると思います。

では、明らかに相手に落ち度があるような場合には、無言のままにしているのが思いやりの精神に合致するのでしょうか。仮にそのようにした場合には、「はっきり申し立てよ」という前述の原則と矛盾するのではないか、という方がいらっしゃるかも知れません。しかし、別に矛盾はありません。そうした場合には、「申し立てよ、しかし丁寧に」という対応の仕方が正解だと思います。

これらのことは、まことに尤もなことだとお感じになる方が多いことでしょう。正に、こうしたことは、何も外国人を相手にする場合だけではなく、日本人同士の間においても、全く妥当することであり、人間として最も大切な心配りといえると思います。それらは、社会生活上、人と人との接触をぎすぎすしたものにならず、皆が気持ち良く生活できるようにという知恵であるといえましょう。

個人主義的色彩の強い欧米社会においては、社会生活や人との接触を円滑化するために各種のルールやマナーが比較的よく発達しています。その代表的なものが「サンキュー」と「エクスキューズ・ミー」であり、欧米の社会生活上の基本的単語とすることができるでしょう。このような基本的な言動が、日本では近年ともすれば軽視されがちであるのは残念なことです。日本の日常においても、こうした思いやりの言葉をもっと頻繁に使うことを心掛けたいものです。

相手がある場合、その相手をこちらの思うようにもっていきたいとするならば、力づくの対応、ハードな対応よりも、むしろソフトな対応が結局のところ成功をおさめることになる場合が少なくありません。これは、ちょうどイソップ物語の「北風と太陽」の寓話にある通りです。またその方が、お互いに気持ち良い結果になります。思いやりの心は、それ自体貴重な価値を持つことですが、何事につけ良い結果をもたらすという観点からみても、大切な要因であると思います。

外国語の習得

「地球人」になる第三の条件は、外国語の習得、つまり国際的なコミュニケーションの道具として何らかの外国語を身に付けることを指摘したい。外国人と接触する機会が増えることは、いうまでもないことながら、異なる文化、異なる思考様式、異なる価値観を持つ人々と相互に意志疎通をする必要がある機会が増えることを意味しています。こうしたコミュニケーションにおいては、ジェスチャーを十分利用して、あるいは通訳を介して用件を取り運ぶこともむろん可能ですが、しかし効率が良いとはいえず、また誤解も生じがちです。

従って、日本が国際化する趨勢が続く下では、常識的ないい方ではありますが、やはり外国語の習得ないし習熟が大切な要件といえます。ただ、ここで強調しておきたいのは、外国語を学ぶということの本当の意義についてです。外国語を学習するのは、第一義的には、それをコミュニケーションの手段として用いるためと考えられており、事実、外国語が上達すれば、その面での利用価値には大きいものがあります。

しかし、外国語を学習することのより本質的な意義は、日本語の構造あるいは日本的発想様式とは異なる言葉の構造ないし発想の様式を学習することを通じて、日本あるいは日本語を世界の中で相対的にみることを可能にすることにあると私は考えています。このゆえにこそ、外国語の学習は、異文化間におけるコミュニケーションの円滑化に貢献すると考えられるわけです。国際化時代に外国語の学習の必要性が叫ばれることの深い意味は、この点にこそあると私は理解しています。事実、外国語を学習しても、その言葉を用いて不自由なくコミュニケーションができるようになるまで上達することを期待するのはなかなか困難です。それにもかかわらず、外国語学習は大きな意味があるといえるのは、このような理由によるものとみるべきであります。

このような考え方にに基づき、慶應の湘南藤沢キャンパス(SFC)では、外国語の習熟をコンピューター利用の習熟とともに基礎教育の二本柱としており、一、二年生のうちに少なくとも一つの外国語を徹底して勉強させ、修得させる履修課程を組んでいます。

では、どの外国語を学ぶのがよいのでしょうか。これは、なかなか難しい問題ですが、基本的には、各個人が最も興味ある言葉を選択することになると思います。従来 of 大学では、外国語の学習という場合、「英語プラスその他の外国語」という発想の下に英語は特別扱いされていました。しかしSFCでは、前述したように、英語にこうした特権的地位は与えておらず、アジア諸国の言語(中国語、朝鮮語、マレー・インドネシア語)も含む六つの外国語の中から学生が自由に選択できるシステムをとっています。その場合、集中履修をする外国語としては、英語を選択する学生の比率が最も高いのは自然なことではありますが、アジア言語(ことに中国語)の人気はわれわれ教員が予想していたよりも遥かに高い状況にあり、近年の国際情勢の変化を表わしています。

ちなみに、オーストラリアにおける外国語教育にも一言触れておきますと、同国では日本語の人気が高く、高校や大学における学習人口からいうと、現在ではドイツ語やフランス語を越えて最もポピュラーな外国語(学習人口が最も多い言語)となっています。このため日本語は、大学、高校のレベルで履修科目として設けられているのみならず、中学校のレベル、さらには小学校でもこれを教科としているところが少なくない状況です。

このため、日本語を教える教員の不足が目立っており、「日本語担当の教員を求む」という新聞広告を毎週のように見かけます。また、笑い話のように聞こえるかも知れませんが、高校以下の学校では、これまで代表的な外国語として教えられていたドイツ語やフランス語の教員が余る一方、日本語教員が不足する事態が生じており、このため、ドイツ語やフランス語の教員が急遽日本語を学んで日本語教員に転向するといった現象がみられます。現に、私の所属していたマックオーリー大学の日本語学科では、かつてはヨーロッパ言語を教えていたこうした方たちが今や相当数「学生」として在籍するに至っています。

われわれ日本人にとっては、英語は、最も手っ取り早い外国語であり、しかも現在世界中で

最も汎用性があって便利な言語ですが、二十年、三十年後のことを考えると、中国語あるいはその他のアジアの言語がそれに相当する位置を占めるようになっていくかも知れません。今の若い人々におかれては、英語あるいはそれ以外の外国語を何か一つ身に付けて欲しいと私は期待しています。

結 論

以上、「地球人になる」ための条件として、(一)何事につけ意思表示が大切であり、その場合、はっきりとそして筋を通して主張すること、(二)相手の立場を理解し尊重する思いやりの心を持つこと、(三)一つの外国語を修得すること、を述べました。

学校の教師という職業がら、どうしても説教口調になってしまい恐縮しています。ただ、これらのことからは、私が外国へ旅行し、外国の大学で教壇に立ち、そして外国の組織の中で仕事をする、といった経験から出てきたものであり、何がしかヒントになればと思い申し述べてみました。実際、これらは、私が自分自身に常時言い聞かせていることでもあります。

香川県の東讃といわれる当地は、古くから全国に知られた手袋産業のメッカであります。このため、本日お集まり下さった皆様の中にも、関連する企業の経営に直接関与されている方も多いと存じますが、そうした場合には、外国を相手に人対人、あるいは組織対組織のやり取りや交渉ごとをする機会が一段と増えていると存じます。そして、この東讃に生をうけた若い人々が将来羽ばたくことになる世界は、国際化が一層進んでいる状況になることに疑いありません。

日本の社会にとっては国際化は不可避であり、それは好き嫌いを越えた大きな流れであります。このことを今一度認識するとともに、そうした時代に相応しい心構えを個々人が持ち、それに相応しい行動をしていくことが大切だと思います。

自分の住み慣れた社会と違う社会や違う考え方があることを知るの楽しいことでもあります。また、そうした人々との接触が増えることは、自分たちの社会の良さや問題点を見直す機会が与えられることをも意味しています。国際化は、結局、それを積極的に受けとめることによって人生を豊かにするものである、といえると思います。

ご静聴、ありがとうございました。

(香川県大川郡ライオンズクラブ「世界を知ろう会」での講演、
一九九四年七月二十三日)